

「地域づくりオープンカフェ」発言内容（概要）

- 1 開催日時 平成26年12月20日(土)13時30分～17時
- 2 開催場所 杉妻会館 4階 「牡丹」
- 3 主な発言内容

【今年度取組を行った大学生】

- 集落には、鞍掛山等の山々、水などの自然、柳橋歌舞伎をはじめとする伝統芸能、人柄の良さといった誇れる資源がある。地域の自然を生かし、ハイキングコースを作るなどし、将来的には、山ガールの集まる場所にすべき。
- 地域内に仕事がないのなら、耕作放棄地を活用し、地域の特産品を作り、直売所や農村レストランを開設し産業を生み出すべき。
- 集落内には、自給的農家が多く、料理も各家庭で異なり、馴染みのない味付けが多かった。食の発信や合宿客の受入等を実施すべき。
- 各家庭で、家の周りに花が植えられていたり、町の事業でダリアの栽培がおこなわれていたりすることから景観が整備されている。今後は、景観の良さを外部へ発信する魅せる工夫及び耕作放棄を活用した花の栽培を実施すべき。
- 集落の60%が70代以上という高齢化が進んでいる集落だが、それぞれ高齢者が自立した農業を行っている。高齢化というピンチをチャンスととらえ、80歳以上が作る「米寿米」、70代が作る「喜寿米」というように米のブランド化を行いたい。
- 集落の豊かな自然や集落で実施されてきた炭焼き等の体験活動を生かし、四季ごとに自然体験メニューを作り、都市部との交流を行いたい。
- 集落の住民の方は、学生や都会の人が身に着けていない知識や技術を持っている。そういった住民の方々の知識を生かすため、木の伐採や農業体験等の実践的なプログラムを構築したい。
- 都会に物を売るなど、流通を通した収入の確保だけが、集落の活性化ではないと思うので、地域内で体験メニューなどを作り、外部の人に来てもらうことが集落の活性化につながるのだと思う。
- 帰村に向け何が障害になっているか聞き取り調査をした結果、現在の帰村計画は帰村までの計画であり、帰村後が見えないため、帰村後の生活や将来に対する不安が障害となっている。
- 帰村後の生活支援、飯館村の存続のためには様々な分野で活躍できる若者の確保が必要。
- 従来まで住民が集まって話し合う場がなかった。しかし、フィールド調査やワークショップを実施するにつれ、住民が議論し、これから自分たちがどうやっていけばよいのかという提案まで自分で行うことができるようになった。

- 学生が農家民泊を実施したことで、他人を家に泊めることに抵抗を感じていた人も、抵抗が薄れ、集落外の人と触れ合うことで自信をもってきた。
- 湯ノ花集落は、温泉があり、観光地であるが、外部の人へうまく情報発信できていない。集落のPRのため、福島市より集落からの距離の近い宇都宮市のイベントや学祭で集落のPRや、ばんでい餅という郷土料理販売を行ったところ、大好評で集落の方も自信を持てた。
- 集落内の温泉には、暖簾もなく、どこが温泉の入口なのか分からなかったため、暖簾を作成し、集落の温泉に設置することとした。
- 集落のフェイスブックの従来閲覧数は100程度であったが、宇都宮市内のイベント等に参加し、集落をPRした結果、閲覧数が10倍以上になり、情報発信の重要性を感じた。
- 仮設住宅の高齢者は、支援の対象ではなく、復興の担い手。避難している住民の方々の日常生活に潜む力を発揮してもらうことで復興進むと思う。
- 2年間の調査で、住民が自分の地域に問題意識を持っていないことが分かった。
- 地域資源は、地域の方々が作る手料理。地区内の農産物直売所でイベントを実施することで、地域の方々が作る手料理を広く情報発信していきたい。

【受入集落住民の方々】

- 初めて学生を迎えて柳橋の良いところ悪いところを知る良い機会になった。今後は学生の提案を地域住民と一緒に取り組んで、過疎化の進んだ集落から脱却したい。
- 行動を起こさないといけないと気付かされた。
- 福島県を含め全国で少子高齢化が進み遊休農地や孤独死、有害鳥獣被害が増加している。学生が来てくれ、元気とエネルギーを与えてくれた。大学生が来ていた日は地区が明るく盛り上がった。
- 若く柔軟な考えを参考に地域内で情報共有し、明るい地域にできるよう努力したい。
- 大学生の新しい考えで、当たり前だと思っていたことに物語を作り出してくれた。
- 高齢化が進んでいる現在だからこそ、長い歴史を持つ集落の伝統文化継承に繋がる良い活動だったと思う。
- 松川の避難所に移り住んで3年9ヶ月が経ち生活のための設備も整いましたが、学生さんたちが、仮設住宅に来てくれ、飯舘村をどのようにしていくか熱意を持って取り組んでくれている。大学生達のエネルギーを貰って、年寄り達だけでも頑張っていこうとしている。
- 大学生を受け入れた2年を通じて集落でも、やれば出来ると気付かされた。学生が集落に入った時、我々の集落の印象は後ろ向きだと聞いてはつとした。それを学生の皆さんがここまで変えてくれた。地域のみなさんもがんばれた。
- 大学生を受け入れ、集落の分からないところをたくさん見つけていただいた。大学生に

情報発信していただいたが、観光地湯ノ花は、しっかり情報発信できないといけないと思った。

- 平成25年度いっぱい廃校となった地区の学校の校舎を活用し学生さんにふれあいキャンプを実施していただき、大変盛り上がった。皆寂しがっていた時にイベントを開催できて元気をもらった。

【先進事例報告】

- 学生が集落に入ること、「気づき」の創出、地域の資源化、集落の受入主体の設立ができた。
- 学生との活動に住民の方が参加することで集落内に対話の機会が増え、女性が参加するようになった。
- 大学と集落の交流は、課題解決実践型、交流型、価値発見型、知識共有型の4つに分類される。大学生の力を活用した集落復興支援事業は、その中の価値発見型。そこで、出た資源を集落の人が、実行に移していくのがサポート事業でも支援できる課題解決実践型。しかし、交流型への支援がない。交流型への支援を行政にお願いしたい。
- 大学生事業はきっかけ。それを生かすも殺すも地域次第。大学と集落が交流を続けるのは、地域と学生の熱い思い。大学や地域おこし協力隊を卒業したとしても地域と大学、人と人が伴奏するようにつながり続けていくことが大切。
- 地元で頑張っている人は、「土」、外部から定期的に地域を訪れ、地域と交流する人は「風」、外部から流れてきてその地にじわじわとしみこんでいく人が「水」であると思う。

【意見交換】

- 調査という名前ですが、調査の対象として見るのではなく一緒になって活動する。あるいは一緒に何かを楽しむ。外から若者の手で何か新しい事業をしていただけたらいいなと思う。
- 具体的に何がどうなることが活性化なのかということ具体的に考えて、地域の方に考えていただくということが必要。それがなくままに活性化すると言ってもどこに向かうのか分からず、何がどうなるというような目標がないと達成感が無いと思う。
- 他の集落他の自治体といえども、地域が近いと特産物が似ている。今個々の地域でそれを売るといいが、ネットワークを繋いで連携しながら売って行った方が良く思う。そのためにも、福島県の中でのネットワークづくりを県には進めてもらいたい。
- この場で発表したプレゼンをそれぞれ各地域で実施することが重要。是非、地域の人々に発表してもらい、自分たちの住んでいるところの現状について気付いてもらいたい。
- 都会からの交流人口だけではなく、地元出身の交流人口をいかに改善させるかということが重要だと思う。
- この事業を実施した後地元の人たちが自分たちで地域づくりをいかに作っていくかとい

うところが重要だと思う。

- これだけのグループが県内各地の中山間地域で同じようなことをやっているのは、良い意味でライバル。ここでできたつながりをいかに作っていくのかが大切。県がその役割を担うのも一つかもしれないが、自分たちでつながりを作ろうという行動を起こすことも必要だと思う。

【コーディネーター】

- 都市部に住む子ども世帯の方々と、集落に住む高齢の方々がどう連携していくかが重要。都市部に住む子ども世帯の方々が土日やお盆などの長期休暇に帰ってくることで、高齢の親世代が集落に住み続けることが出来る。これが崩れると一挙に過疎化が進むこととなるのでこの状況をどう維持していくかが課題である。
- 昔鉱山があったり製鉄をしていたりという歴史的な蓄積や現代人が身につけていない知識や技術を持つ方がいることも日本の山間部集落の特徴。そういった人々を万能丸といい、万能丸を発掘していくことも重要なテーマ。